様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成 22 年度～平成 24 年度
課題番号：22730393
研究課題名（和文）　満洲移民の戦後言説に関する社会学的研究

研究課題名（英文）　The Sociological Research about the discourse on the Manchurian Settlers in the Postwar Japan

研究代表者　猪股祐介
（INOMATA yusuke）
京都大学国際交流推進機構国際交流センター・非常勤講師
研究者番号：20513245

研究成果の概要（和文）：
満洲移民の戦後言説に関して、次の三つを明らかにした。第一にソ連進軍後の満洲移民女性に対する戦時性暴力、第二に満洲縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築、第三に在満日本人の経験の類型化である。

研究成果の概要（英文）：
I revealed the three points about the discourse on the Manchurian settlers in postwar by this research. First, the military sexual violence against women after the invasion of Manchukuo by Soviet Union, Second, the public sphere of historical reconciliation between Japan and China constructed by the person concerned about Manchukuo, and Third the typology on the experience of the Japanese in Manchukuo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 22 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 23 年度	700,000	210,000	910,000
平成 24 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計			

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：満洲移民、戦時性暴力、ホモソーシャリティ、歴史和解、国際交流

１．研究開始当初の背景

①国内・国外の研究動向

戦後日本のアジア・太平洋戦争に対する歴史認識において、「満洲」は大きな位置を占めたその満洲認識は、満洲移民の「引揚げの悲劇」に基づく被害者意識に偏っていること、それが日本人の戦争観を歪めてきたことが指摘されてきた（Young　1998 など）。

しかし、現在のような「引揚げの悲劇」（中国残留日本人を含む）の物語は、戦後 60 年余をかけて形成されたものである。戦後日本社会は、「帝国の崩壊」と「引揚者の再統合」という問題に対処しつつ、新しい国民意識を形成する過程で、「満洲移民の言説」を生産してきた。

近年の引揚研究は、引揚言説が戦後ナショナリズムに強く規定されたことを明

らかにした。そこでは二つの指摘がなされた。一つは、「日本」「女性」「開拓団」という共同性を再生産するかたちで、引揚げが語られたとする指摘である（成田 2005）。いま一つは、引揚者・抑留者集団の在外財産補償運動から、「引揚げの悲劇」が語られたとする指摘（浅野 2004）である。特に後者の指摘を、引揚言説における「被害者意識の肥大化」のメカニズムを、特定の時代の国家と社会集団との関わりにおいて明らかにしたものとして、重視する。

②本研究の位置付け

本研究は、引揚言説に対する戦後ナショナリズムの規定性を指摘した、引揚研究の問題意識を発展させ、満洲移民の言説が「引揚者の悲劇」に収斂した理由を、敗戦から現在の、満洲移民の言説を生産する社会関係の変容によって説明する。

従来の引揚研究は、特定の時期、特定の言説に限られてきた。これに対して、本研究は、引揚者のうち、満洲移民に対象を絞り込む一方で、期間を戦後全体に広げ、戦後ナショナリズムと満洲移民の言説の相関関係について、通時的な変容を分析する。満洲移民の言説における「被害者意識の肥大化」のメカニズムを、戦後の各時期について、国家・地域社会・社会集団の間の相互作用に注目して分析する。

満洲移民の言説の変容を分析するうえで、成田龍一の「戦争像の系譜」（成田 2005）が参考になる。成田は「戦争の語られ方」の変遷を、「体験」の時期（1945-65）、「証言」の時期（1965-90）、「記憶」の時期（1990-）と区分した。本研究は、この区分を有力な作業仮説として用いる。

２．研究の目的

①満洲移民の言説の変容

満洲移民の言説として次の四つを扱う。第一に、満洲移民関連団体が刊行した記念誌である。第二に、満洲移民経験者が刊行した体験記である。第三に、一般読者向けの「小説」である。第四に、満洲移民（中国残留日本人含む）が社会問題化する過程で生じた世論である。

これらの満洲移民の言説を、「体験」・「証言」・「記憶」の三つの時期ごとに収集・整理し、その言説の特徴を明らかにする。具体的には、満洲移民に関する記念誌・体験誌・小説を収集するほか、満洲移民に関する新聞記事や国会議事録を収集し、それらの内容分析を行う。

②言説を生産する社会関係

言説を生産する社会関係を、「体験」・「証言」・「記憶」の三つの時期ごとに分析する。

「体験」の時期：引揚者団体による「定着援護」「在外財産補償」運動を核とする、国家・満洲移民関連団体・体験者の間の社会関係を明らかにする。特に、引揚者団体のなかで満洲移民関連団体が占めた位置や、団体とその成員の間に生じた齟齬に注目する。

「証言」の時期：『満洲開拓史』の刊行とそれに続く県・開拓団単位の『開拓史』の刊行を核とする、満洲移民関連団体・地域社会・体験者の間の社会関係を明らかにする。加藤(2009)は、県・開拓団単位の『開拓史』を『満洲開拓史』のコピーに過ぎず、「引揚げの悲劇」の強調に終始した、歴史的検証を欠いたものと断じる。これに対して応募者は、岐阜県白川町の事例研究より、地域社会には独自の歴史認識が根付いていると考える（→研究業績１－３）。そこで全国の『開拓史』について、その内容や編纂過程を検討する。

「記憶」の時期：山崎豊子『大地の子』(1991)や城戸久枝『あの戦争から遠く離れて』(2007)等の一般読書向けの小説とそのテレビドラマ化を核とする、マス・メディアと受容する読者・視聴者との間の社会関係を明らかにする。1990 年代以降、マス・メディアと読者・視聴者の社会関係が、満洲移民の言説の生産にいかなる影響を与えたかを分析する。

３．研究の方法

研究の方法は、満洲移民の言説の収集・整理して特徴を析出する「言説の内容分析」と、満洲移民が社会問題として語られる状況における、国家・地域社会・社会集団の関係を析出する「社会関係の分析」の、二つの方法をとる。

「体験」の時期（1945－65 年）については、満洲移民の言説の収集・整理・分析と、引揚者団体による「定着援護」「在外財産賠償請求」運動での、国家・満洲移民関連団体・満洲移民体験者の主張と満洲認識を明らかにする。

「証言」の時期（1965－90 年）における、満洲移民の言説の収集・整理・分析と、『満洲開拓史』の刊行とそれに続く各県・各団単位の『開拓史』刊行について、『開拓史』の編纂過程における、地域社会・満洲移民関連団体・体験者の社会関係と、各々の満洲認識を明らかにする。また、満洲移民関連団体が、中国残留日本人の帰国促進・定着援護活動に関わるなかで、いかなる満洲移民言説を生産してきたかを明らかにする。

記憶」の時期（1990－）における、満洲移民の言説の収集・整理・分析と、『大地の子』『あの戦争から遠く離れて』等の小説の出版・テレビドラマ化における、マスメディアと読者・視聴者の社会関係を明らかにする。また、平成２２－２３年度の成果と合わせて、戦後日本の満洲移民の言説の全体像を提示する。具体的には以下の作業を行う。

４．研究成果

満洲移民の戦後言説に関して、次四つの特質を明らかにした。第一にソ連進軍後の満洲移民女性に対する戦時性暴力、第二に戦後開拓との連続／断絶、第三に満洲縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築、第四に在満日本人の経験の類型化についてである。

第一に、満洲移民女性に対する戦時性暴力である。2000 年代の満洲移民経験者に対する聞き取りを分析した。その際ソ連兵によるドイツ人女性の強姦を、「強姦の予想」「強姦の経験」「強姦の結果」「強姦の後」に分け、各時期の歴史的文脈を分析したグロスマン論文にならった。まず戦前のジェンダー規範を考察した。単身女性にソ連兵による強姦の犠牲を強いる下地となったことを指摘した。次に出征兵士の妻ではなく単身女性が、強姦の被害者となったことを考察した。出征兵士と男性団員との男性同盟主義を明らかにした。そして強姦被害者が、開拓団の記憶から抹消される過程を考察した。最後に被害者が 2000 年代の聞き取りで、自らの経験を語った理由を考察した。

第二に満洲移民と戦後開拓との連続／断絶である。従来満洲移民と戦後開拓との連続は、満洲経験の共有や人的関係の重なりによって説明された。これに対して、両者の連続性が、戦前の農漁村更生運動と戦後の農村民主化に共通する規律＝訓練によることを、岐阜県郡上市凌霜塾関連資料や高鷲町大日婦人会会誌の分析により明らかにした。

第三に、満洲縁故者による歴史和解である。ハルピン市方正県日本人公墓をめぐる日中の満洲移民縁故者の間の国際交流に関する多角的な検討を行った。具体的には主に次の 4 点からである。すなわち、(1)方正県に満洲移民引揚者が集結した経緯、(2)方正県の日本語学校が果たした役割、(3)日本人公墓建設を許可した周恩来の思想、(4)方正県の中国帰国者と親戚縁者の関係、以上の 4 点である。

第三に、在満日本人の経験の類型化である。まず満洲体験は満洲国以前の関東州（大連・旅順）居住者、満洲国の官僚・軍人と会社員、そして満洲移民の三者で異なることを明らかにした。その上で、満洲経験の出版物から三つの理念型が抽出されることを指摘した。すなわち(1)被害者の物語、(2)開発の物語、(3)ノスタルジアの物語である。関東州居住者に(3)、満洲国官僚・軍人に(2)、満洲移民に(1)が多いことを明らかにした。

上記四研究から、親密圏と公共圏の再編成にという視角より、満洲移民の戦後言説について以下のような結論に達した。第一に、満洲移民女性に対する戦時性暴力は、開拓団の親密圏の論理を経由して、日本人引揚者の犠牲として公共圏に接続された。第二に、満洲移民家族の親密圏は、更生運動・民主化（文化）の公共圏により再編成された。第三に、日本人公墓を中心に満洲縁故者による公共圏が構築され、それが日中の満洲縁故団体を支えた。第四に、在満日本人の親密圏のあり方が、戦後社会の満洲移民言説という公共圏に規定されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
1. 猪股祐介. 2010.「異郷に郷土をつくる－凌霜塾と郡上村開拓団」.『『史苑やまと』(8)： 34-47.
2. 猪股祐介. 2011.「オーラリティにおいて当事者性を問う意味」.『日本オーラル・ヒストリー研究 』(6)： 49-51.
3. 猪股祐介. 2012. 「満洲移民の引揚経験」.『アジア遊学』(145)： 66－75
4. 猪股祐介. 「試行錯誤の村づくりに学ぶ：蛭ヶ野の戦後開拓の意義」. 『郡上学』(5)： 64-82.

〔学会発表〕（計４件）
1. 猪股祐介. 2010. 「岐阜県における満洲移民の送出, 岐阜県における満洲移民送出について」. 京都大学人文科学研究所「移民の近代史」共同研究班（班長：水野直樹）.
2. 猪股祐介. 2011. 「満洲移民と郷土主義:岐阜県郡上村開拓団を事例として」. 京都大学人文科学研究所「移民の近代史」共同研究班（班長：水野直樹）.
3. 猪股祐介. 2011.「満洲移民経験者の語りの登場：1950 年代の「開拓団史」を中心に」. 日本社会学会.
4. 猪股祐介. 2012. 「『満洲』引揚げの戦時性暴力再考―開拓団表象の解体に向けて」. サロン・ド京都.

〔図書〕（計４件）
1. 貴志俊彦他編著. 2012.『２０世紀満洲歴史事典』吉川弘文館.
2. 猪股祐介.2013.『満洲移民における引揚げと親密圏の再編成：戦後日本社会への再定着を中心に』. 京都大学文学研究科グローバル COE.
3. 猪股祐介. 2013.『満洲縁故者による歴史和解に向けた公共圏の構築』. 京都大学文学研究科グローバル COE.
4. 猪股祐介編著. 2013. 『帝国日本の戦時性暴力』. 京都大学文学研究科グローバル COE.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（　　）

研究者番号：

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：